

連珠っておもしろい

九段 河村典彦

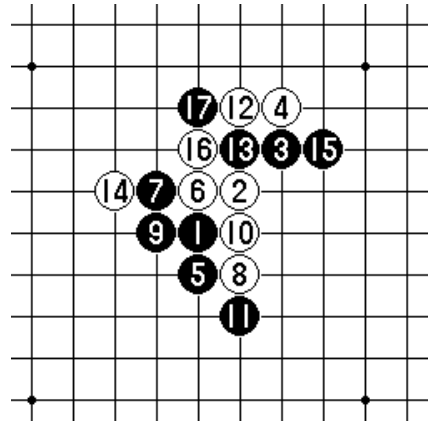
● 第113回 ●

■ 遅くなったA級リーグ

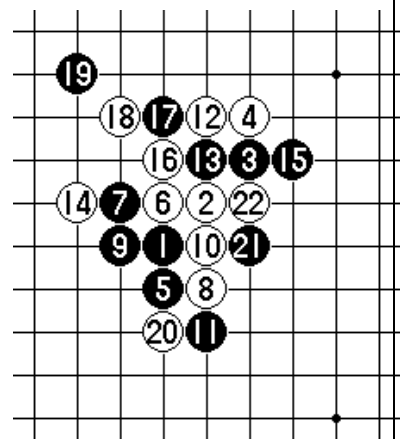
コロナに翻弄された連珠界であるが、A級リーグもその影響で9月から1月に変更になった。年が明けてからオミクロン株が急速に広がったので、1月3連休の開催は今から思えばベストのタイミングだった。観客を入れなくても最近では棋譜速報を入れてくれるので、検討しながら見ることでできた。多少解説もしていたので、満足感があるA級リーグだった。

結果は既報の通り中山君の優勝となった。彼の連珠は今期は完璧に近かったのだが、1局だけ負けていた局があった。それが最終局の長谷川戦である。今回はその局を詳しく調べてみた。

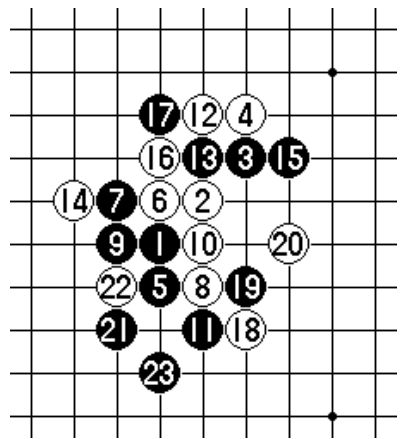
● 第9局
黒 長谷川 白 中山



仮先の長谷川九段が長星を提示すると、中山八段が白4と5題を指定した。長谷川九段が黒を取って、5、6、7、9、10を打ったと言いつた。ちなみに、黒5を8では黒が負けるので要注意だ。白4までで遊星の形に戻っているのので私が書いた「遊星ガイド」を読み返してみると、黒17までの手が書いてみると、黒17までは言うことではない。次の白18が問題の一手だった。

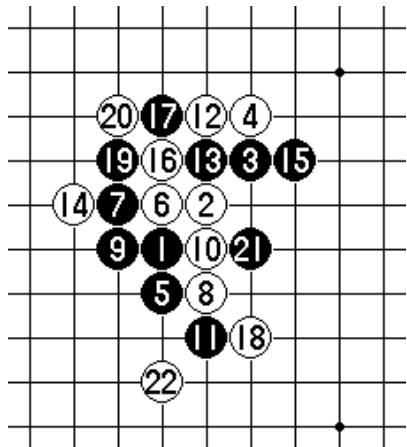


普通に考えたら、白18、20ぐらいのもので、白22までなら不満はないだろう。



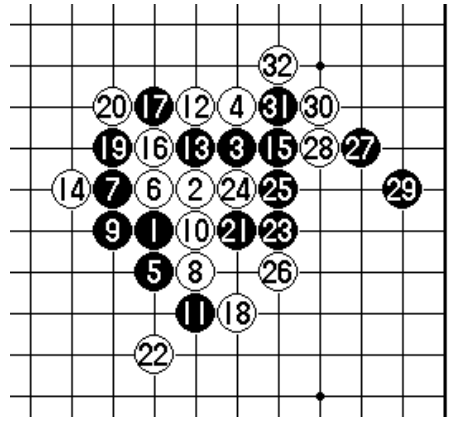
ところが、実際に打たれたのが白18。何だ？この手は？という感じの一手で、攻めでも防ぎでもない中途

半端の一手に見えた。実際、黒は19から一気に勝つことができた。黒19がうまい一手で、四追いがあるので下から止めることができない。白20には黒21、23と打てば高段者なら勝ち切ることは容易だろう。

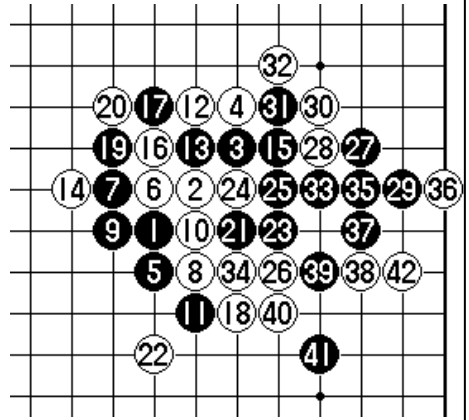


実際は黒19、21と打ったのだが、先ほどの手に気が付かなければ、この手も実戦的で手堅い。こうなると白22から防ぐのはやむを得ないだろう。問題は、黒23から右辺で勝ちがあるかどうか？だ。勝てそうな気もするが、難しい。

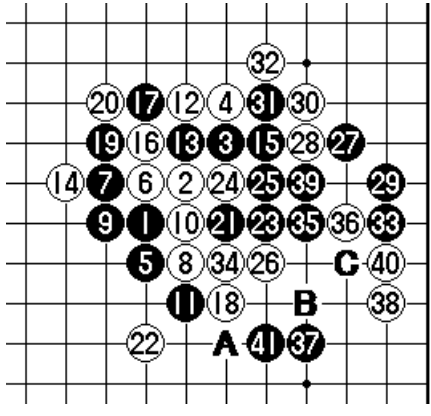
黒はここから攻めるしかない。黒23と飛び出して25と三を引くのが唯一と思うが、次の攻めが難しい。実際は黒27、29とミセ手を打った。このあたり定点カメラで映していたのでリアルタイムで見えていたのだが、長谷川九段は力強く早く着手していた。おそらく勝ちと思っていたのだろうと見ていたが、見ている方はパソコンで調べているので勝ちが見つかからない。白30、黒31の後にどう打つのかを注目していた。



普通こういう形では黒35、37と引いて勝ちなのだが、白34で剣先ができるのが黒にとつて厄介だ。黒39に白40が先手となるのである。黒はなかなか勝てないソフト解析では出ていた。さて、黒の長谷川九段はこれに気が付いたのでどうするか？ここまですら打っていた割には考えて、次の手を打った。



白はこの手を予想していたのか、ほぼノータイムで白34と防いだ。この手は剣先を使って止めようとした手なのだが、少々危険だった。と言うのも、実は黒35から勝ちがあるというのがソフトの指摘だったからだ。黒35と伸びて37と剣先を止めておくのが妙手で、白38なら黒39を利かせてから41と打てば、以下AとB Cの両フクミでなるほど防ぎがない。ところが、実際は白に防ぎがあった。



がどう止めるのかも難しい。

黒37は部分的には防ぎがないが、呼手である。したがって、白38から反撃が可能で、白40と引く手がある。黒41を下止めは四迫いなので、続けて白42と引けば黒43が絶対で、白の四ノビ筋ができる。この四ノビ筋を使って、先ほどの黒勝ち筋を止めることができる。具体的には黒45の時に白46と止めればA点が四々禁のためここは止める必要がない。また、Bの剣先もあり白防ぎ切れる。一局でこれほど楽しめるのはA級の魅力でもある。

